

## [講演要旨]鳥海山 1801年噴火以前に存在したスパイン？ -古絵図にのこされた「不動石」の記録

秋田大学教育文化学部\* 林 信太郎・相澤幸之助

18世紀の鳥海山山頂部の絵図には「不動石」と呼ばれる屹立した岩が描かれている。「不動石」は、1801年の新山溶岩ドームの形成によって破壊され、現在では古絵図でしかその姿を見ることができない。「不動石」はその形態からスパインの可能性が高い。スパインは高粘性のマグマにより形成されるが、言うまでもなく高粘性のマグマはしばしば爆発的である。鳥海山の将来の火山活動と防災を考えるうえで「不動石」の存在には大きな意味があると考えられる。今回の発表では「不動石」の記述されている絵図の信憑性について検討し、様々な縦横比で描かれた「不動石」の絵図のどれが実際の不動石に近いのか、検討を行った。

「不動石」の記録:「不動石」が古文書や絵図に見出せるのは、1704年の庄内藩と矢島藩の境界争いの際の一連の古文書と1740、1801の噴火記録の中である。1704年の境界争いの際には様々な絵図が作成された。山形県史に収録された鶏肋編中の『鳥海山公事』から、これらの絵図の成立過程が明らかにされている(『続鳥海考』須藤儀門、1989)。まず、矢島藩側で『境目縁絵図』が作成された(庄内藩側でも作成されたい)。庄内藩は矢島藩側の『縁絵図』を奉行所から借り受け矢島藩側立ち会いのもとで寸違わないコピーを作成した。これが『立ち会い絵図』と呼ばれる。その後幕府による山頂部の検分の際にはこの絵図が使われ、不動石近くの瑠璃の壺の地形が絵図と異なり、矢島藩側は説明に苦労した。下山後幕府の検使により『鳥海山群境出入に付御裁許御絵図』が作成された。これは大物忌神社に現存する。さらにこれを元に『おこし絵図』が作られたと推定される。この『おこし絵図』を元に『張抜山型』が作成され、その控えが山形県に残されている。

不動石の形態・大きさ:このような一連の絵図が描かれた経過を考えると幕府の検分直後に作成された『鳥海山群境出入に付御裁許御絵図』に描かれる不動石が実際の形態に近い可能性が高い。この絵図では幅1に対して高さ8-10のかなり細長い岩として不動石が描かれている。また、『おこし絵図』でもほぼ同様の比率で描かれ、およそ100年後に描かれた1801年噴火の実地検分による絵図にも同様の姿で描かれている。また、『鳥海山公事』には不動石の形態に関する文書中の唯一の記録が有る。「…不動石八不

動岩有之候得共不動之形二無之石二無之岩二御座候高サ五尋程二候…」とあり、不動尊像の形には似ていないこと、その高さは五尋程-すなわちおよそ9m-立ったことが、書かれている。絵図に描かれた不動石も不動尊とは類似性がない。不動尊の持つ剣の形には類似している。

以上の点から考えて、不動石は誇張はあるにしろかなり細長い形態をもって屹立する岩だったことが推定できる。その大きさはおよそ9m程度だった可能性が高い。

不動石の位置:不動石はどの絵図を見ても七高山と瑠璃の壺の間すなわち、瑠璃の壺の東に描かれている。瑠璃の壺は絵図により描かれている位置が異なり、荒神ヶ岳の北東あるいは東に描かれている。もし、新山溶岩ドームは荒神ヶ岳の北東に位置する。もし瑠璃の壺が荒神ヶ岳の東にあったとすると、その一部が地表に露出しているはずである。ところが現在では瑠璃の壺に相当するような地形は全く観察できない。したがって、瑠璃の壺は荒神ヶ岳の北東にあったと推定される。これをもとに不動石の位置を推定すると新山溶岩の頂部の直下にその位置が推定される。

考察:18世紀の鳥海山山頂には不動石と呼ばれる細長く屹立する岩が存在した。その高さは9m程であった可能性が高い。形態から見て、この岩はスパインである可能性が高い。ただし、このように小さなスパインがほぼ単独で存在することは考えにくい。一方、溶岩ドームに小規模なスパインが伴うことはしばしば観察されている(昭和新山など)。もし、不動石の近くに溶岩ドームがあったとすると、小規模スパインの存在が理解しやすい。不動石の西隣にあった瑠璃の壺には池が存在したらしいが、溶岩ドーム状に描いた絵図も多い。これは、瑠璃の壺そのものが溶岩ドームであるか、あるいは瑠璃の壺脇に溶岩ドームが存在していた事を示唆する。不動石は瑠璃の壺に関連したドームに付随するスパインの可能性もある。現在では、瑠璃の壺、不動石共に新山溶岩ドームの下にあり、絵図からの推定以上の研究は難しい。

\*〒010-8502 秋田市手形学園町 1-1